佐土原キリスト教会 2023 年 9 月 10 日礼拝説教
聖書箇所：マタイ福音書 5 章 10～12 節
説 教 題：この幸いは私にも

「世の光」で、大島重徳という先生が証しをしておられました。先生のお母さんは、嫁ぎ先の家族から、また小姑さんから、教会に行くことをずっと責め続けられて、その姿を、先生は子供の頃から見ておられたそうです。先生が大人になってから、お母さんに「良く信仰を捨てなかったね」と聞いたら、お母さんが「私には神様しかいなかったからね」と言われたそうです。家族に責められながら、コツコツと礼拝生活を守る、そんなお母さんのお姿が目に浮かぶような気がしたことでした。また先生とって、このお母さんの信仰の影響は大きいだろうと、羨ましくもありました。

さて今日の箇所は「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから」(10)という「八福の教え」の 8 番目の「幸い」の御言葉と、それに続く 11～12 節です。「義のために迫害されている者は幸いです」、「義のために迫害されている…」とはどういうことなのか。なぜ、その人たちが幸いなのか。いやそれを考える前に、まず確認しなければならないことがあります。それは、イエスがここで「天の御国はその人たちのものだから」(10)と言っておられることです。「天の御国はその人たちのものだから」、この言葉は「八福の教え」の最初に「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから」(3)として出て来た御言葉です。つまりここで「初め」に戻っているのです。「初めに戻る」とは、つまり、「心の貧しい者」も「義のために迫害されている者」も同じ人のことが言われているということです。「八福の教え」は、まず「心は貧しいが、悲しんではいない」、そういう人のことが語られ、次に「悲しんでいるが、心貧しくはないし、柔和でもない」、そういう人のことが語られている、というわけではないのです。全部が同じ 1 人のキリスト者の生き方、在り方として、語られているのです。だから「心の貧しい者」と聞いて、「それは私のことだ」と言う人―(その「幸い」を願う人)―は、「義のために迫害されている者」と聞いても、「私のことだ」と言えるようでありたいのです。しかし、ある人は言いました。「『義のために迫害されている者…』という言葉を行くと…どこか突き放されたように感じる。なぜなら『自分は義のために迫害されている』と手を上げることがなかなか出来ないように思うからだ」。皆さんはいかがでしょうか。自分のことを「私は義のために迫害されている」と思われるでしょうか。あるいは「私には縁遠い」と思われるでしょうか。

キリストの教会は、多くの殉教者を出しました。10 年近く前、大分の国東半島に「ペトロ岐部」という人の銅像を見に行きました。「ペトロ岐部」、400 年前、国を追われ、ローマまで行き、司祭に叙されますが、迫害の嵐が吹き荒れる日本に帰って来きて、隠れて信仰を守っている切支丹達を励ましながら九州から東北まで行き、ついに仙台で捕縛され、江戸で殉教した人です。彼を取り調べた幕府の役人は書き残しました。「ペトロ岐部、転び申さず候―(ペトロ岐部は最後まで決して信仰を捨てなかった)」。迫害している役人が書いた文章ですが、畏敬の念さえ感じさせます。銅像の横の資料館でこの言葉を見た時、私の目は、この言葉に釘付けになりました。繰り返しますが、キリストの教会は、このような多くの迫害や殉教の経験を持っているし、私達の信仰は、これらの先達の経験に負っているのです。

しかし、この 10～12 節の御言葉を考える時、ペドロ岐部や、そのような「迫害された先達」のことを知っていれば、それで良いのか、というと、それではこの「幸い」が、私達とは関係のない「幸い」になってしまいます。もし「私には関係がない、私には当てはまらない」ということになると、私達は「この幸い」から漏れてしまうことになるのです。

しかもイエス様は、11 節で「その人たち」という 3 人称の言葉ではなく、「あなたがたを…あなたがたは…」(11)と 2 人称で目の前の弟子達に、つまりこの言葉を読む全ての人に―(私達に)―語っておられます。ということは、私達は自分のこととしてこの御言葉を考えなければならない、というか、自分のこととして考えたいと思うのです。そうすると「義のために迫害され…る」とは、私達にとってどういうことになるのでしょうか。

イエスは 10 節の「義のために」(10)を 11 節で「わたしのために」(11)と言い換えておられます。「義のために迫害される」とは、直接的には「イエス様への信仰のために迫害される—(辛い目に遭う)」ということでしょう。そう考えると、私達にも、イエス様への信仰の故に負わされている十字架が大なり小なりあるのではないでしょうか。

最初にご紹介した大島先生のお母様の経験のように、例えば「家族の無理解」ということがあるかも知れません。あるいは千葉でお世話になった先生は、長い間、管制官をされましたが、職場の飲み会で「キリスト者であることを酒の肴にされて辛い思いをした」と話して下さったことがあります。そういうことかも知れません。あるいは、職場で、地域の中で、キリスト者である故の様々な戦い、不利益、生き難さ、不都合ということもあるかもしれない。カナダで出会った姉妹がお父様の話をして下さいました。祭りの時期になると、その地域の神社が地域の全部の家の前に「しで」というのでしょうか、独特の形に切った紙を挟んだ綱を張るのだそうです—(広瀬でも見かけます)。お父様は、自分の家の前に綱を張られるのを断るのに大変な戦いがあったようです。でもその姉妹は、そんなお父様のことを、良い意味で誇りにしておられるようでした。

あるいは、伝道をしようとする時もそうでしょう。三浦綾子さんのご主人の光世さんが「トラクトを配って怒鳴られた経験がある」と何かに書いておられました。佐土原教会は、この会堂が建って間もない頃、佐土原の全家庭に「トラクトと教会案内」を配ったことがありましたが、その時、同じような経験をされた方がおられたと伺いました。いや、そもそも教会が、クリスチャンが、主に従って歩んで行くこと自体が、実は困難なことではないでしょうか。カナダ・メノナイト教会の総会で「教会が存在するのは、クリスチャンとして生きて行くのは、デインジャラス・ビジネス(危険な務め)です。犠牲が伴う」という説教を聞きました。(この説教は「しかし神が素晴らしい景色を見せて下さいます」と続くのですが…)。ある時の「アナバプテストセミナー」では「現代の殉教は、地方で福音宣教に生きることである」という言葉も聞きました。「私達が伝道の使命に生きること、そのものが、世の抵抗を受けること、覚悟すべき苦難なのだ」と教えられたように思ったことでした。そう考えると、この御言葉が私達にも直接的に関わる言葉になって来るのではないでしょうか。もちろん、命に係わるようなことではないかも知れませんが、私達もこの言葉を、私達への語り掛けとして受け取ることが出来るのではないでしょうか。

さらに「義のために迫害される」、「イエス様のために迫害される」、それには、こんなことも言えるのではないでしょうか。それは「イエス様を信じる者はその生き方が違ってくる、その故に困難な思いをすることがある」ということです。初代教会のクリスチャン達が迫害された大きな理由は、彼らが皇帝礼拝をしなかったことですが、同時に当時の奴隷制社会の中でクリスチャンは生き方において奴隷制を乗り越えて行ったということがあります。教会では奴隷と自由人の区別がなかったのです。奴隷がリーダーになれた。彼らはイエス様に倣った、聖書に従ったのです。それを周りの社会は見過ごすことが出来なかったのです。奴隷制社会が揺さぶられるからです。その意味で私達も、本気になってイエス様に従って生きる時、世の生き方とどこか違ってくるのではないでしょうか。信仰問答で紹介した、ある会社の社長秘書の女性の話をご記憶でしようか。ある日、社長に電話がかかって来ました。社長は、女性に「留守だと言ってくれ」と言いました。彼女は社長に言いました。「ご自分でどうぞ。私は、ウソはつきません。どんな時でもウソはつきません」。社長は、彼女に激怒しましたが、落ち着いてから、ウソをつかない彼女をますます信用するようになったという話です。日本人の生き方の大原則は「損をしないように生きること」だそうです。しかし彼女のように、そこで葛藤を覚えたり、損をするように見えたり、苦しい思いをしたりすることがあるのかも知れません。それも「イエス様への信仰故の苦しみ」です。しかし、いずれにしてもその時、私達は「この幸い」を生きることになるのだと思います。

イエスに従うとは、具体的にはイエスの言葉に従うことです。この文脈では「八福の教え」です。そして今朝の御言葉は「八福の教え」のまとめ的な言葉です。「八福の教え」は「関節的な命令の言葉」です。「心の貧しい者は幸いである」とは「心貧しくあれ」ということです。そうすると「義の

ために迫害されている者は幸いです」とは「義のために迫害される者であれ―(『イエスへの信仰のために迫害される者であれ』)」という意味になります。さらに言い換えれば、「『八福の教え』に迫害されるほどに打ち込みなさい」と言っておられると理解することも出来ます。

「八福の教え」は次のような教えでした。①「心の貧しい者は幸いです」:「自らの無力、愛の貧しさを知り、本気になって神にすがって行く、神に求めて行く、そのような信仰生活を歩みなさい」、②「悲しむ者は幸いです」:「人生の悲しみ、また自らの罪を悲しむことを通して神の慰めを知る者でありなさい、そして悔い改め続ける者でありなさい」、③「柔和な者は幸いです」:「逆境の中にあっても、耐えて、腹を立てずに善を生きる、そしてひたすら神を待ち望む、そのような信仰に生きなさい」、④「義に飢え渇く者は幸いです」:「神の義が成ることを信じ、諦めずに祈り、自らも精一杯の正しさと優しさに生きて行きなさい」、⑤「あわれみ深い者は幸いです」:「あなたが神から頂いている大きな『憐れみ』を思い、あなたも隣人に憐れみ深くありなさい」、⑥「心のきよい者は幸いです」:「清くない者に注がれる神の憐れみにすがって一途に、愚直に神を見つめなさい、そして遜って神を礼拝して生きなさい」、⑦「平和をつくる者は幸いです」:「神に赦されて神との平和を持たせて頂いたことを力に、自らも愛と赦しに生き、隣人との関係に平和を創り出す生き方をしなさい」。私達はここに生きているのか。しかし、このような生き方は、どこかで世の常識―(私達の人間的な価値観)―とぶつかるのではないでしょうか。

私は良く「アーミッシュの赦し」の話をします。アーミッシュの村の学校に近所の男が猟銃を持って乱入して 5 人の子供を殺して、自分も自殺しました。しかし、アーミッシュの人達は、大きな悲しみをこらえ、事件の 6 時間後には犯人の妻の所へ行き、こう言いました。「私達は彼を赦します。あなた方も家族を亡くしました。悲しみを分かち合いましょう」。彼らは、子供達の葬式に犯人の家族を招き、犯人の葬式にも多数が出席しました。全米から送られて来た義捐金を犯人の家族と分け合いました。彼らは愚直に「赦し」に生きました。「平和」に生ました。「善」に生きました。しかし否定的な意見もあったのです。「簡単に人が赦されるような社会には住みたいとは思わない」。「彼らは現実を無視している」。戦時下にメノナイトが「イエス様は平和を教えられた。敵を愛する愛を教えられた。自分達は銃を取らない。人は殺さない。戦争には行かない」と言うと、「社会の寄生虫だ」と迫害されたのです。私達が「イエスの教える生き方」に本気になって取り組む時、恐らくそこに価値観と価値観の衝突が起きるのです。パウロは言いました。「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます―(問題を抱えます)」(2 テモテ 3:12)。

イエス様は 11 節で「わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し…」(11)と言っておられます。イエスご自身が、世の人々を愛し、「神はあなたを愛しておられる。あなたも神にとって大切な 1 人なのだ。神に帰りなさい。裁きではなく赦しに生きなさい」と語り続けられました。しかし、世の権力者に非難され、迫害に会い、最後は、死刑に価する罪人として殺されました。であれば、イエス様に従う者も、本気になって従う生き方をすれば、どこか世の価値とぶつかることになるのではないでしょうか。しかしイエスは、「そのように生きなさい」と言われるのです。「その時、あなたは幸いだ」と言われる。

なぜ「幸い」なのか。もし、私達が迫害されるほどに―(世の価値観とぶつかるほどに)―イエス様に打ち込むとすれば、それはそのまま、私達が本物のキリストの弟子であることを証明することになるのです。数年前、当時東京基督教大学の学長でいらした小林高徳先生が宮崎に来て話をして下さったことがあります。先生は最後に「キリストは色々な場で否定されている。私達はキリストの友として、現実の生きる場で、キリストを弁護しなければならない、キリストを証ししなければならないのではないか」と言われました。置かれた場で、生き方を通して、言葉を通して、主を証しして行くのです。主の道を生きることは、世の人に認められず、むしろ偏見を持たれて生きることかも知れない。それでも主を第一として、主に従って生きて行く時、私達は―(小林先生によれば)―「イエス様の友になる」のです。そこで私達は、自分がキリストに属する者であることを確認することが出来て、またそこでイエス様と一層深く交わることになるのではないでしょうか。三浦綾

子文学館の森下辰衛先生も、イエス様への信仰の故に犠牲を覚悟して困難の道に押し出された方ですが、今、三浦綾子の本を通して伝道して、「『とうてい信じられないほどのこと』を経験させられている」と言っておられました。その恵みが、色々な形で私達をも覆うはずです。その中でしか経験し得ない恵みを、イエス様を、経験して、そしてイエス様が言われた「幸い」を自分のものにするはずなのです。

しかし何より大きな理由は、12 節に「喜びなさい。喜びおどりなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです」(12)とあるように、そのようにイエスに従って生きる時、どんなに神が喜んで下さるか、そして私達を待っている祝福がどれほど大きいか、イエス様がその約束をして下さっているからです。「ヘブル書」に「これらの人々は…地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです」(ヘブル 11:13)とあるように、私達の人生のゴールは、天でイエス様にお会いする時です。地上でイエスへの信仰に生きて行くことは、本当にそうしようとするなら、それは厳しいことかも知れない。でも、そのように生きる時、私達には「躍り上がって喜べ」と言われたような確かな報いがあるのです。パウロは言いました。「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います」(ローマ 8:18)。天国は私達の想像を遥かに超えたところだと思います。その祝福が約束されているのです。

いずれにしても、私達は「自分には『義のために迫害される』というような状況は縁遠い」と思う必要はない。私達もイエスへの信仰に生きる時、おそらく世に在って世の価値とぶつかる、そして「生き難さを強いられること、葛藤や闘いを強いられること」があるのだと思います。それがそのまま「義のために迫害されること」です。でも「今の日本の教会が弱い、その一番の理由は、主のために犠牲を払おうとしないことだ。イエスのために何の犠牲も払ったことのない人があまりにも多すぎるのではないか」と言った神学者がいます。「クリスチャンが恵みばかりを求めようとする」ということでしょうか。信仰の恵みは確かに大きいです。世の何物も与えることが出来ないほど大きな恵みです。しかし私達は、主に従って生きることの犠牲も、信仰生活の中に計算に入れて、天の御国を目指すさらに深い一歩に踏み出して行きたいと、行ければと、願います。